令和4年8月1日発行　毎月1回1日発行　ボランティア情報　昭和52年11月12日第三種郵便物承認

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

ボランティア情報

2022 8月号 no.543

福祉教育わたしの実践

山口県 美祢市社会福祉協議会　地域福祉課　課長　羽根 一孝さん

【小学生の課題解決プランを地域の大人と、ともに考える】

次世代の子どもが地域課題を自分事として受け止めることを目的に、美祢市の小学校では福祉教育を行っています。小学校と同じ思いをいだいてきた美祢市社会福祉協議会（以下、市社協）は、大嶺小学校6年生と地域の協力者と一緒に、総合的な学習で「ＭＩＮＥ（みね）ナンデス！」を実施しました。

ＭＩＮＥナンデス！を担当する市社協の羽根さんは、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の委員として、長年、大嶺小学校の運営に関わってきました。「小学校とは以前から接点がありましたが、どれも単発の福祉教育の実施でした。そうしたなか、社会教育活動に積極的な校長先生が赴任されたことで、市社協が望んでいた体系的な福祉教育を実現できました」と企画の意図を語ります。

大嶺小学校の福祉教育は、4年生で地域福祉全般を学んだ後、5年生で地域安全マップづくり、6年生では、全4回のプログラムとして行われます。具体的に、1・2回目のプログラムでは、市役所や地域の方々からヒアリングを行い地域の現状を知り、地域課題を見つけ、解決策を話し合います。3回目に実施されるＭＩＮＥナンデス！は、小学生が「将来こんな美祢市であってほしい」、「私たちにはこんなことができる」と考えたプランを発表し、地域の大人と、ともに考える場です。

ＭＩＮＥナンデス！では、80人の6年生が7つのグループに分かれ、人口減少や少子高齢化、福祉の充実、農業の後継者不足などのテーマについて話し合いました。市役所の地域振興課や建設課、市社協など、小学生が考えた課題に関係する部署の人も集まり、会場の体育館は人でいっぱいになったそうです。「市役所から課長級の人たちまで来てくれて驚きました」と羽根さんが話すように、行政の関係者による協力は成功ポイントの一つでした。

その時に提案された「地域を盛り上げるために市内のシャッター街にシャッターアートを描く」というプランは、実現に向けて動き出し、「アートプロジェクト」として小中高生や地域の大人が一緒に制作を進めています。

羽根さんは「つなぐ」と「広がり」を意識して、小学生の活動に地域の大人を巻き込んでいったそうです。「小学校だけでなく、中学校や高校、大人と、ライフステージごとに地域について考える機会や場所をつくっていきたい」と、これからの活動にも意欲を見せています。

Contents

P.2▶ 特集　地域と“つながる”ボラセン広報のくふう
P.6▶ 実録ボランティアコーディネーター
P.7▶ 必見！ ファシリテーションを学ぼう！
P.8▶ 発災とともに駆けつけ、協働で支援し、被災者に寄り添う

ふれあいネットワーク
社会福祉法人 全国社会福祉協議会

特集

地域と“つながる”ボラセン広報のくふう

今回の特集では、社協ボラセンの職員が、どのような課題意識をもち、工夫した広報戦略を展開してきたのかについて着目し、今後の社協ボラセンによる地域住民への情報発信を考えるきっかけを提供します。

事例1

広報紙『ボラまち』の制作と配布を通して、ボランタリーな地域をめざす。紙媒体ならではのメリットを活かし、地域のつながりづくりをすすめる

新潟市・中央区社会福祉協議会

伊藤さん

中央区は、新潟市の放射状に伸びる交通軸の要に位置し、さまざまな都市機能が集積しています。区内は新しい世帯が増え、子どもの数が増えている地域がある一方で、高齢化が深刻な地域もあります。こうした地域の状況から、世代間交流や地域での助け合い活動が必要とされているなか、中央区社会福祉協議会(以下、区社協)としては、広報紙を通して住民の地域への愛着を育みたい考えです。今回はその広報紙についてお話を伺いました。

新潟市中央区社会福祉協議会　ボランティア・市民活動センター　ボランティアコーディネーター
伊藤 久美子(いとう くみこ)さん／桐生(きりゅう) 加代子(かよこ)さん

ボランティア活動の盛り上げをめざし、広報紙をリニューアル

長引くコロナ禍の影響で、新潟市中央区でも、従来のようなボランティア活動が行えない状況が続いていました。区社協のボランティア・市民活動センター(以下、VC)としても、ボランティア活動者とのつながりが希薄になっていたといいます。そうしたなか、つながりを保つとともにボランティア活動に対する雰囲気を盛り上げようと、伊藤さんたちが取り組んだのが、広報紙『中央区ボランティア・市民活動センターだより』のリニューアルです。

これまで、広報紙では保険の手続きや主催講座の案内など、VCからの情報を掲載するのが中心で、発行部数は1,300部、配布先は登録ボランティア団体や公共施設など限定的でした。そこで伊藤さんたちは、紙面を通してボランティア活動者とのつながりを強くするとともに、ボランティアの情報に触れる機会が少ない地域住民にも、親しみをもってもらえる媒体にリニューアルすることを目標にしました。

具体的なリニューアルのポイントは次の通りです。

まず、ボランティアに興味がない人も手に取りやすい雰囲気を出すため、媒体のタイトルを『ボラまち』に変更、デザインもなるべく柔らかくしました。「デザインはまったくの未経験」と語る伊藤さんは、「線の入れ方ひとつで紙面の印象が変わってしまうので、デザインの仕事をされている方と知り合うたびにアドバイスをもらっていました」とリニューアル当初を振り返ります。

また、内容については、職員がさまざまなボランティア活動者や取り組みを取材し、その記事を写真とともに掲載する企画を中心としました。さらに、登録ボランティアの協力のもと、一見ボランティアとは直接関係のない美容や健康情報、レシピなどを紹介するコ

『ボラまち』第3号(2020年11月発行)で、古町芸妓が小学校の福祉教育に訪れた様子を取材した

中央区社協の入口にあるラックには、バックナンバーも豊富に設置している

助成金情報

(公財)大和証券福祉財団「2022年度ボランティア活動助成・子ども支援活動助成」(2022年9月15日締切)

高齢者・障がい児者・子ども等への支援活動、ならびに大規模自然災害による被災者への支援活動に対する助成。
(詳細は「大和証券福祉財団　助成」で検索)

ラムを設けることで、幅広い読者の興味をひく工夫としました。

こうしてリニューアルされたボラまちは、2020年7月に第1号を発行し、現在、奇数月に一度のペースで毎号7,500部を定期発行しています。

制作や配布の工夫で、1人でも多くの人に届ける

制作過程において、伊藤さんが特に時間をかけているのが、企画のネタ集めです。「日々の業務のなかだけでなく、休日に買い物に出かけた時なども企画に役立ちそうなことがあったら覚えておくようにしています」と語ります。取り上げるテーマがかたよらないよう、ボランティア団体の話題だけでなく、企業や外国ルーツの方、高齢者や子ども、世界が注目するニュースなど、幅広く目を向けるようにしています。

また、取材をする際は他のメディアと異なる、社協独自の切り口で記事にすることを伝えています。例えば、新潟駅のリニューアルについて取材した際は、一般的には利便性や経済効果などがクローズアップされがちですが、ボラまちでは福祉の視点に立った工夫について紹介しました。

また、発行部数を増やすのと並行して配布先の拡大にも努めました。リニューアル当初こそ配布先とのつながりが少なく、設置を断られることもあったそうですが、許可をもらった配布先に、ほかに設置できそうな場所を紹介してもらうほか、配布先の実績を伝えながら交渉するなど工夫しました。

現在、配布先は従来の登録ボランティア団体や公共施設などに加え、区内の学校やこども園、商業施設など585か所にまで広がっています。各配布先には可能な範囲で直接手渡しをしていますが、それが難しい場所には郵送しており、発送作業は毎号ボランティアに手伝ってもらっています。「発送先が多く時間がかかりますが、コロナ禍で活動の機会が減っているなか、ボランティアの皆さんと顔を合わせて交流できる楽しい時間になっています」と、伊藤さんは語ります。

ボラまちの取材や配布を通して得た、新たな発見や手応え

ボラまちは職員がVCの事業を紹介するツールとして活用する場面もあるため、毎号500部ほど多めに印刷しています。「VCの事業は、初めての方には説明しづらかったり伝わりづらかったりしますが、名刺と一緒に『こんな活動をしています』と手渡せるものがあることでコミュニケーションがスムーズになります」と伊藤さんはメリットを強調します。

また、伊藤さんは、ボラまちを通して得たものについて次のように語ります。「地域のたくさんの人とのつながりが生まれたことは大きな成果です。そのおかげで、すぐそばで行われているのに、今まで気づかずにいた活動がたくさんあることがわかりました。ボラまちをきっかけにつながった取材先や設置先の皆さんは区社協を応援してくださるとともに福祉やボランティアを盛り上げてくださる心強い存在です」。

桐生さんも「ボラまちで紹介した内容について問い合わせをいただくことがとてもうれしいです」と語ります。「楽しみにしているよ」と声をかけられることもあるそうで、「また頑張ろうと思えますし、やりがいにつながっています」と力を込めます。

紙媒体として広報紙を発行するメリットと今後の展望

近年、SNSをはじめさまざまな情報発信のツールがあるなか、あえて紙の広報紙を選んだ理由について、伊藤さんは次のように語ります。「紙の媒体には、手に取る人を選ばないよさがあります。わざわざWEB検索をして情報を入手する手間もありませんし、高齢者のなかにはSNSになじみのない方も多くいらっしゃいます」。桐生さんは「取材先の皆さんの思いや、制作側の気持ちなど、人のあたたかさが伝わりやすいと思います」と語ります。「情報が届かない人を1人もつくりたくないので、これからも紙で情報発信することを大事にしていきたいです」と2人は口をそろえます。

一方で、ボラまちはあくまでもコロナ禍における情報発信を強化する目的で発行しているため、今後ボランティア活動が可能な日常が戻ってきた時には、状況に合わせて位置づけを変えていきたいと考えています。

伊藤さんは今後の意気込みを次のように語ります。「ボランティアは、経験のない人には特別なことだと思われがちです。しかし、例えば道を聞かれて教えるとか、雪かきで隣の部屋の人を気遣って雪をよけるとか、日常の身近なところにボランティアはたくさんあります。ボラまちでそうしたことを伝え、地域の皆さんのボランティアに対するハードルを下げることができたらと思います」。

広報のあり方の一つとして、紙媒体の魅力を最大限に活かす取り組みに期待が寄せられます。

沼垂テラス商店街のカフェ「miiba(みーば)」では、インテリアの一部のようにかわいく設置されている

『ボラまち』第13号(2022年7月発行)。ウクライナの支援に関する話題を取り上げた

助成金情報

全国労働者共済生活協同組合連合会「こくみん共済 coop＜全労災＞地域貢献助成2022年」(2022年9月16日締切)

「人と人とが支え合い、安心して暮らせる未来へ」をテーマに、「防災・減災活動」「環境保全活動」「子どもの健全育成活動」といった活動の輪を結び、安心のネットワークを広げていく取り組みを助成。(詳細は「coop 地域貢献助成 2022 年」で検索)

事例2

コミュニティFMやSNSを活用し、幅広い世代へ情報を発信。地域防災を主軸に関係機関との連携を深めつつ、ボランティア登録団体とのコミュニケーション活性化も実現する

埼玉県・深谷市社会福祉協議会

和やかな雰囲気で収録

埼玉県北西部に位置する深谷市は、深谷ネギやチューリップの生産、渋沢栄一の生誕地として知られています。2006年に深谷市・岡部町・川本町・花園町が合併し、現在の深谷市になりました。

深谷市社会福祉協議会（以下、市社協）は、防災の観点から地域住民への情報発信体制の強化を模索するなかで、地域の関係機関との協働を図り、2021年に開局したコミュニティFMによる情報発信に取り組んでいます。その活動は、防災にとどまらず多様な地域貢献の契機を生み出しています。

深谷市社会福祉協議会　地域福祉係 次長補佐兼地域福祉係長　荻原（おぎわら） 祐輔（ゆうすけ）さん／主事　井上（いのうえ） 杏実（あずみ）さん

地元FM局とタッグを組み、地域防災の向上に取り組む

「FMふっかちゃん」の愛称で知られる深谷コミュニティFM（以下、FM）は、地域経済の活性化や地域防災支援を目的に情報を発信するローカルラジオ局です。同じく地域防災を重点課題の一つに掲げる市社協は、FMの運営方針に共感し、週に1回、10分の生放送コーナー「ゲストでおネギ～します」の企画運営に協力しています。

毎回、市社協の職員や、深谷市ボランティア・市民活動サポートセンター登録団体がゲストとして出演し、番組パーソナリティーのリードのもと、地域福祉の取り組みやボランティア活動の紹介を行っています。

このような取り組みが実現した背景には、非常時にFMと市社協が機能的に連携するため、また、双方の活動を住民に知ってもらうためにも、平常時から継続的に活動しておくことが必要だとの考えがありました。

登録団体も生放送で緊張しながらしっかりPR

生放送・原稿なしのラジオ出演という思い切った決断

番組では出演者にふだん通り話をしてもらえるよう、あえて原稿は用意していません。荻原さんと井上さんも原稿なしで出演していますが、社協がラジオ番組に原稿なしで出演するためには、通常なら決裁を通すのが容易ではありません。この点について荻原さんは「決裁を得ることを考える前に始めてしまったというのが正直なところですが、もちろん市社協内での理解も得ています。市社協のPRとなる有意義な取り組みですからね。当然市社協職員を名乗る以上、発言にも配慮しています」と語ります。

出演が決まった登録団体が「私たち、今度ラジオに出るよ」と周囲に宣伝することで、番組自体の宣伝にもなり、「ゲストでおネギ～します」はリスナー数の拡大にも貢献しています。井上さんは「ラジオ聴いてるよ、と声をかけられることが増えました。番組内で子ども食堂への寄付のお願いをした時には、放送後に寄付が増えたので驚きました」と手応えを感じています。

番組出演協力が、登録団体との関係性の深化につながる

市社協と登録団体との関係にも、変化が生まれました。特別な用事がなければ、顔を合わせるのは年2回の連絡会の時くらいでしたが、ラジオ出演が決まった登録団体とは、その前後には必ず何度か連絡を取り合うため、交流が深まります。「それを機に、助成金の相談などに話が発展することもあります。交流が活発になったことで、相談を気軽に持ちかけてもらえることが増えました」と、荻原さんは語ります。

また、これまで登録団体のイベント告知は、主に市社協が年5回発行する広報誌への掲載という形で協力してきました。しかし、紙面のスペースが限

市社協、FM、JC 3者で包括連携協定を締結

助成金情報

（一財）齋藤茂昭記念財団「2022年度 助成事業」（2022年10月31日締切）

障害者、LGBTQをはじめとする社会的マイノリティの能力発揮とQOL（クオリティ・オブ・ライフ）の向上に関する活動に対する事業への助成。（詳細は「齋藤茂昭記念財団 2022年」で検索）

られているうえに原稿締め切りや発行日のタイミングで、登録団体の要望に添えないことがありました。その点ラジオなら、イベント開催に合わせて出演スケジュールを組むことができるので、登録団体からは有用なPRツールとして重宝されています。

登録団体の方々自身の気づきをもたらす効用もあります。ボランティア活動に携わる方の多くは「自分のしていることはたいしたことではない」「当たり前のことをしているだけ」と考えがちで、活動を自ら発信することは少ないものです。しかし、番組に出演して語ることは、自身の活動が評価に値するものであると改めて知るきっかけになります。これは荻原さん、井上さんにとっても、想定外の副産物でした。

地域活性化に関する包括連携協定を締結

防災を主軸にしたFMとの連携に、地元の深谷青年会議所（以下、JC）も賛同し、2021年12月、市社協、FM、JCの3者は、地域活性化に関する包括連携協定を締結しました。

連携の意義について荻原さんは「3者ともに防災の取り組みを拡充したいと同じ思いをもっていたので、それなら一緒に活動すれば、効果的だと考えました」と説明します。ただし真のねらいは、さらに多くの関係団体を巻き込み、深谷の防災体制をより盤石にすることでした。締結後から毎月行っている会合には、FM、JC、市社協のほか、オブザーバーとして自衛隊や埼玉県社協、周辺市町村の社協、日本赤十字社埼玉県支部、市役所、警察などが同席しています。

3者とオブザーバーによる会合

周辺市町村の社協の参加は、荻原さんの「深谷市の取り組みが参考になるならどんどんまねしてもらいたい」との考えによるもので、若い職員の参加を積極的に受け入れています。

また、2022年6月に深谷市周辺で降雹（ひょう）が発生した際には、直ちに協働活動により、雹被害を受けた人気品種のトウモロコシ「みらい」の格安販売を行いました。荻原さんは、「ふだんからLINEグループで情報交換をしていたおかげで、すぐに対策を練り、実行に移すことができました。社協単体ではこうした対応はできなかったかもしれません」と振り返ります。

若い世代へメッセージを伝えるために大胆なチャレンジも

また市社協は、若い世代に向けた情報発信を念頭に、深谷市ボランティア・市民活動サポートセンター公式の各種SNSアカウントを運用しています。FacebookとTwitterについてはあらかじめ運用規程を作りましたが、そこで議論となったのが、リアルタイムで発信することの是非でした。SNSの醍醐味はその場でその時間に発信できることであり、翌日に事務局の承認を得てからようやく発信するのでは、投稿の価値も半減します。

荻原さんはリアルタイム発信を譲りませんでした。投稿時にはほかの職員にもアラーム通知が届くようにし、不適切な表現や不都合があった場合には、直ちにほかの職員にも投稿を削除できる体制を徹底することで、稟議・決裁を経ずにイベント会場等からその場で投稿しています。実際にこの仕組みが機能したこともあります。「義援金の街頭募金の様子を画像つきで投稿した時のことです。顔が写らないよう配慮はしましたが、写り込んだ方から『背中越しではあるがこれは私だとわかる』とご指摘を受け、直ちに投稿を削除しました」（荻原さん）。

SNSにはこうした課題がつきものです。井上さんは「ほかの市町村社協から、多くの問い合わせや相談をいただきます。主に、どんな運用規程を作ったのか、どう社協内で調整したのかなどです」と内情を打ち明けます。市社協では、LINEでの情報提供や問い合わせ受付を行っているほか、TikTokの活用についても準備中です。一方、紙媒体でも、夏休みボランティア体験のような子どもを対象にしたパンフレットでは、子どもたちの目に留まりやすいよう、人気YouTuberの決めゼリフをまねた見出しを使うといった工夫を積極的に行っています。この軽いトーンの紙面制作を担当した井上さんは「承認を得るのに勇気が要りましたが、情報を届けたい一心でチャレンジしました」と語ります。この見出しの効果もあり、ボランティア募集の枠はすぐに埋まったそうです。

前例のないことにも挑戦しようとする市社協の風土について、荻原さんは「地域の課題解決につながることであればハードルがあっても突破したいですし、そのためなら若い職員のバックアップも喜んでします」と語ります。こうした職員間の強い信頼関係も、若手の井上さんらが「社協の当たり前」にこだわらず自由なアイデアを提案し、実現に向けて挑戦することができる力になっているといえそうです。

今日はなに～？

今日はボランティア！

この夏、君たちが
ボランティア活動をしない
可能性これ　一切な～い

深谷市ボランティアセンターでは、福祉施設や地域の方々にご協力いただきながら、「彩の国ボランティア体験プログラム」を実施します。ボランティア活動にはじめの一歩を踏み出す方を応援しています。ひと夏の思い出をつくるとともに、この夏でひとまわり大きくなりませんか？

ボランティア活動を通して、好きぴを見つけましょう♡

※深谷市

彩の国ボランティア体験プログラム　体験講座

No.	講座名	対象	会場	内容	日時	定員
1	気象情報を活用した防災講座～天気を知って災害から自分を守ろう～	小学4年生～中学中生	深谷市ボランティア交流センター（本住町12-8）	なぜ天気が知りたい？事前準備とりまき？天気情報を活用した防災を学ぶ	7月29日(金) 9:30～12:00	20人
2	気象情報を活用した防災講座～地球温暖化を知ろう～	高校生以上	深谷市ボランティア交流センター（本住町12-8）	なぜ天気が知りたい？事前準備とりまき？天気情報を活用した防災を学ぶ	7月22日(金) 9:30～12:00	30人
3	座禅体験&お寺ボランティア	小学1年生～中学生生	福城光寺（福田町北9-25）	座禅を通して、自分を見つめ自分の立ちいを整えるとお寺内の清掃や交流をする	7月27日(水) 10:00～11:30	20人
4	座禅体験&お寺ボランティア	小学1年生～中学中生	福城光寺（福田町北9-25）	座禅を通して、自分を見つめ自分の立ちいを整えるとお寺内の清掃や交流をする	8月3日(水) 10:00～11:30	20人
5	オンラインで手話体験	小学1年生以上	ZOOM	手話の先生、聞こえないかたとZOOMでつながり、手話で自分の名前やあいさつを学び、交流する ※参加者は自分のビデオオン	8月1日(月) 10:00～11:00	5人
6	オンラインで手話体験	小学1年生以上	ZOOM	手話の先生、聞こえないかたとZOOMでつながり、手話で自分の名前やあいさつを学び、交流する ※参加者は自分のビデオオン	8月23日(火) 14:00～15:00	5人
7	オンラインでさぐらネコ&アニマルセラピー犬を知ろう！	小学1年生以上	ZOOM	アニマルセラピー犬やさぐらネコについて学び、体験もします。アニマルセラピー犬も登場！	8月18日(木) 10:00～11:00	8人

※Wi-Fi等のネットワーク環境を準備できる方に限ります ※通信費は参加者負担

「ボランティア体験プログラム」チラシの表紙

助成金情報

（公財）ヤマト福祉財団「2023年度　障がい者福祉助成金」（2022年11月30日締切）

障がいのある方々の給料を増額するための新規事業の立上げや生産性向上に必要な設備や機器を購入する資金と、障がいのある方々の福祉を増進するための事業や活動の資金を助成（詳細は「ヤマト福祉財団　障がい者福祉助成金」で検索）

実録 ボランティアコーディネーター

ボランティアセンターのコーディネーターは、今、どのようにボランティアの皆さんや地域と連携・協働し、まちを暮らしやすくする活動に取り組んでいるのでしょうか。
ボランティアセンターを支える「人」に焦点を当て、ボランティアセンターの役割を考えます。

第5回 絶妙な世代差コンビで小美玉市ボラセンを盛り上げる！

茨城県　小美玉市社会福祉協議会

社協紹介

小美玉市：人口49,295人（2022.7.1）
茨城の県央部に位置し、東京都心から北東約80キロ、南部は霞ケ浦に接する。
小美玉市社会福祉協議会（以下、市社協）では「あなたとつくるふれあいのまち」を基本理念に事業を展開、50か所以上の「ふれあい・いきいきサロン」が仲間づくりの場として機能しています。

小美玉市社会福祉協議会
- 本所ボランティアコーディネーター
  飯田（いいだ） 絵里香（えりか）さん（左）
- 美野里支所ボランティアコーディネーター
  長谷川（はせがわ） 滉人（あきひと）さん（右）

Q お二人はボランティアセンターに配属されて何年目ですか？

A（飯田）9年目です。市社協に入職してもう25年目になります。
（長谷川）新卒で入職して2年目です。日々、飯田さんから勉強しています。

Q 市社協の特徴や地域との関係について教えてください。

A（飯田）市社協職員は地元出身者が多いため住民との距離が近く、気軽に集まったり相談しやすい環境です。住民からは「スマホの使い方を教えて！」なんて相談もよくあります（笑）。また、知らぬ間に住民のどなたかが市社協の花壇の水やりをしてくれていることも。
（長谷川）私が担当する支所には入浴施設があり、お風呂のついでに声をかけてくれるなど、住民の方といい関係を築けていると思います。

Q お仕事でやりがいを感じた印象深いエピソードは？

A（飯田）数年前、退職後の活動について相談を受け、子どもの読み聞かせボランティアにつなげた女性がいました。後に私の母が他界した時、その方がわざわざごあいさつに見えたんです。「あなたのおかげで私の第二の人生が豊かになり感謝している。ぜひお母様にもごあいさつを」と。私は人の人生に関わる大切な仕事をしていたんだ！ と驚き、責任の重さに身の引き締まる思いでした。長い職歴で最も心に残る出来事です。
（長谷川）出身小学校の先生からの相談で登下校の見守りに協力したところ、とても感謝されたことです。「地元で活躍できるっていいな！」と感じました。

Q コロナ禍でのご苦労や新しい工夫はありましたか？

A（飯田）ボランティア活動にさまざまな制約が生じ、活動者の意欲も低下気味です。そこで、従来の集合型のボランティアを訪問型に変える取り組みをしました。「おうちでできるボランティア」としてエッセンシャルワーカーへのメッセージ募集や被災地支援のためのマスクづくりなど、試行錯誤しています。
（長谷川）私が担当したのは公式SNSの充実です。ボランティアセンターを紹介する動画の配信に力を入れ、人と会うのが難しい状況でも若い世代や子育て世代へのアプローチを試みました。制作過程では私たち職員にとっても職務について新たな発見がありました。

Q SNSの活用となると若い長谷川さんの出番なのでは？

A（飯田）とても心強いです。今回、二人で取材を受けたのは、私たちが世代の違いを仕事に活かしている点を知ってもらいたかったからです。何と、私が入職した頃、長谷川さんはまだ生まれていないんです。確かにギャップも感じますが、自分にはない発想が新鮮で非常に役立っています。実は長谷川さんは、子どもの頃に市社協へボランティアに来たことがきっかけで福祉の道に進んだそうです。ここでも私は人の人生に影響を与えていたんだと考えると、改めてこの仕事の責任の重大さを感じます。今後もボランティアの魅力を発信し、皆さんに寄り添いながら、思いを「カタチ」にするお手伝いをしていきます。
（長谷川）飯田さんは若い私の話もよく聞いてくれます。今後も相談しながらボラセンを盛り上げていきます。

コロナ禍でも人や地域とつながり続けるための新たな取り組みに挑戦
「おみたま社協チャンネル」YouTube開設

飯田さん、長谷川さんへ ひとこと

飯田さんの経験に裏打ちされた発想力と行動力、そこに長谷川さんのフレッシュなアイデアが加わることで、住民の皆さまのニーズに合った、小美玉らしい活動が生まれているのですね。コロナ禍で厳しい状況が続きますが、みんなで頑張りましょう。

茨城県社会福祉協議会
福祉のまちづくり推進部
生駒　みどりさん

イベント・講座情報

（特非）NPOブックスタート「ブックスタート全国研修会2022 ～シェアブックスのきっかけを確実に届けるために～」
（2022年11月14日締切、2022年11月29日オンライン開催）
長年にわたり公立図書館で絵本を通して子どもの育ちを支えてきた伊藤明美さんによる講演のほか、宮城県多賀城市と兵庫県川西市による事例発表。
（詳細は「ブックスタート全国研修会2022」で検索）

必見！ファシリテーションを学ぼう！

話し合いの場づくりに重要な役割を担うファシリテーションのノウハウを、1年間かけて学びます。社協職員やボランティアコーディネーターのみなさん、一緒に学び、実践に活かしていきましょう。

ファシリテーションの力が、地域を、ボランティアを元気にする！

第5回 始める前にする大切なこと その2 の巻

子どもの頃、ボランティア活動を通してワークショップと出合う。人事労務コンサルタント会社を経て独立。現在、ひとりひとりが「尊重され、存在できる」場づくりをめざして福祉をはじめさまざまな分野で会議やワークショップを進行。また、その手法と考え方「ファシリテーション」を伝える研修を企画・実施している。

特定非営利活動法人
日本ファシリテーション協会
フェロー **鈴木 まり子**さん

1 場をつくる

話し合いのゴールが決まったら、目的に合わせて場をつくります。まず、どこの会場が適しているのか考えましょう。会議室なのか、和室なのか、場合によっては屋外ということもあります。次に、会場が決まったら参加しやすい雰囲気づくりも考えます。会場までの案内板、お茶やお菓子の用意、参加者やプログラムに合った音楽、季節感のある花やディスプレイなどを用意します。参加者の荷物置きや情報コーナーなども必要に応じてつくります。オンラインや、オンラインと対面でのハイブリッドによる開催形式では、マイクやプロジェクターなどの機器の準備も早めに確認します。新型コロナウイルス感染症対策のアルコール消毒や体温計も忘れないようにします。

2 机やいすの並べ方を工夫する

みなさんは会場に入った時の机やいすのレイアウトのまま話し合いをすることがありませんか？ここでは、面倒と思わずに目的に合わせて机やいすの並べ方を変えてみましょう。「え？机やいすの並べ方が、ファシリテーションと関係するの？」と思われるかもしれませんが大いに影響があります。実は空間が話し合いを後押ししてくれるのです。例えば、参加者同士の距離が遠くなると「正しい意見を言わなければ」という心理が働き、発言しにくくなるという傾向があります。反対に、参加者同士が近くなると「話してもいいかな」という心理が働き、本音が出やすい傾向があります。ただし、初対面同士か、親しい関係かどうかでも居心地が良い距離感は変化します。ですから、話し合いの流れや目的に応じた机やいすの並べ方の特徴を理解して、参加者が発言しやすいと感じてもらえるようなレイアウトを考えます。現在はコロナ禍ですから、参加者同士の距離を取ったり、椅子に名札を貼って本人以外は触らないルールにしたりするなど、参加者が安心して参加できるよう工夫しましょう。

レイアウトの特徴

教室型（スクール型）

「これから学ぶぞ」という雰囲気をつくることができます。ただし、話し合いには向かないように思います

ロの字型

ロの字型は皆さん会議で慣れている型かもしれません。ただし、上座・下座になりやすく、横並びの人とは話しにくい場合もあります。

扇型

扇型は中心に向かって椅子を並べます。ファシリテーターに向かって集中できるので、会議のオリエンテーションや、グループで話し合ったことを共有するときに使います。

島型（アイランド型）

島型は、グループで話し合うときによく使われます。同じグループで参加者との連帯感は高まりますが、他のグループへの一体感は薄くなりがちです。

輪型（サークル型）

椅子だけで輪になります。上座・下座がなく、どこからも均等な距離で全員の顔が見えます。初対面の参加者のとき、スタートで使うと緊張する人もいます。

えんた君

段ボールを丸く切った対話促進ツールです。参加者はえんた君を膝に乗せて対話します。同じ大きさのクラフト用紙を乗せて、各々書き込むこともできます。自然と参加者同士が近づき、楽しい雰囲気が生まれます。

書籍紹介

『月刊福祉』2022年9月号（全社協出版部）価格1,068円（本体971円）

特集は、「少子化がもたらすものと この先」。社会に大きな影響を与える少子化の現状とその背景を確認し、さらにこれから先の少子化社会に向かううえでの支援のありようを考える。（詳細は「福祉の本出版目録」で検索）

ボランティア情報
2022 no 543
社会福祉法人 全国社会福祉協議会
全国ボランティア・市民活動振興センター

発災とともに駆けつけ、協働で支援し、被災者に寄り添う
～災害ボランティア・NPOの先達紹介～

各地で災害が発災した際、いち早く被災地に駆けつけ、災害ボランティアセンターや社協と連携・協働を進め、被災者への支援を行うボランティア・NPOの活動を紹介します。

第5回

SeRV（真如苑救援ボランティア）

https://relief-volunteers.jp/about/profile.html

西川 勢二（にしかわ せいじ）
真如苑教務長。1995年阪神淡路大震災の発災時には担当責任者としてSeRV発足に関わる。教団の社会貢献活動における責任者として長く支援活動を担ってきた。

メンバーが日本全国にいることを強みに
－災害エリアにいち早い救援・支援を－

SeRVとは、真如苑救援ボランティア（Shinnyo-en Relief Volunteers）の略で、真如苑の信徒による災害救援活動グループのことです。設立のきっかけは平成7年（1995年）の阪神淡路大震災でした。大震災による大きな被害や悲しみに「私たちに何かできることはないか」「困難に直面する方々のお役に立ちたい」との思いから、真如苑の有志によるボランティアがはじまり、後にSeRVというグループになりました。

大きな特徴の一つは、SeRVのメンバーが日本全国の真如苑施設（国内100か所以上）を拠点に在籍し、ボランティアが必要とされるたびに、出動できるメンバーが参加することです。これまで平成9年（1997年）のナホトカ号重油流出事故をはじめ、新潟中越地震や東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨など、参加者数59,748名、出動196か所の活動実績をもっています。また、地域ボランティアや防災訓練など、地域活動も行う常設SeRVの設置も推進し、各地の自治体等との防災協定の締結にも取り組んでいます。

社会福祉協議会や行政機関、各支援団体と連携をとりながら、災害発生時には被災された方々のニーズに丁寧に応えることを大切にしています。参加するボランティアは特別なスキルのない一般市民ですが、一人ひとりが真如苑で培った利他の心をもってボランティアに臨んでいます。

主な活動

SeRVでは3つの救援活動を行っております。

全国各地で発生する災害に出動する「緊急支援」、東日本大震災等で継続的に行う「復興支援」、地域ボランティア・防災訓練などの「平時の活動」とニーズファーストと寄り添いを大切に地道な活動を積み重ねています。

SeRV

緊急支援	復興支援	平時の活動
炊き出し・泥出し・家屋提供・物資提供・センター支援など	足湯ボランティア・仮説住宅での友愛訪問・引越お手伝い・祭りのお手伝い	地域に根ざしたボランティア（河川清掃・花植え）、スキルアップのため訓練・勉強会など

地元に寄り添った復興支援

災害発生時の緊急支援だけでなく、被災地やその周辺のメンバーが被災された方々に寄り添いながら復興のお手伝いをしたり、平時から災害時に備えてスキルアップのための訓練・研修等にも参加しています。

直近の被災地での活動

●令和４年７月14日からの大雨

SeRV宮城は、松島町災害ボランティアセンター（松島町社協）の要請により、宮城県松島町に出動し、被災者宅での土砂のかき出し・運搬、土のう作りを行う。

●令和４年８月３日からの大雨

SeRV新潟は、関川村災害ボランティアセンター（関川村社協）に協力し、被災宅の畳の搬出、泥のかき出し、床の拭き上げなど清掃を行う。

令和４年８月３日からの大雨

●熊本地震（VCサテライト開設・運営手伝い）

熊本市からの要請を受けて、真如苑熊本支部駐車場の一部にボランティアセンター（VC）サテライトを開設しました。SeRV熊本は、社会福祉協議会、一般ボランティアの方々とともにサテライト運営をお手伝いしました。全国からの団体、個人ボランティアが、このサテライトを経由して支援活動を行いました。

真如苑熊本支部に設置された熊本市災害ボランティアセンターサテライトに集まる一般ボランティア

サテライトの運営を社会福祉協議会、一般ボランティアと担うSeRV熊本

最近の主な災害対応	令和４年７月14日からの大雨（2022年）、令和４年８月３日からの大雨（2022年）、令和３年８月豪雨（2021年）、令和２年７月豪雨（2020年）、秋田水害（2020年）、令和元年東日本台風（2019年）、九州北部豪雨（2019年）、北海道胆振東部地震（2018年）、秋田豪雨（2018年）、平成30年７月豪雨（2018年）、大阪北部地震（2018年）、九州北部豪雨（2017年）、糸魚川火災（2016年）、鳥取地震（2016年）、台風10号・16号（2016年）、熊本地震（2016年）、北関東・東北豪雨（2015年）、ネパール大地震（2015年）、長野県神城断層地震（2014年）、台風18号災害・静岡県（2014年）ほか

〒100-8980　東京都千代田区霞が関3-3-2　新霞が関ビル　TEL.03-3581-4656　FAX.03-3581-7858
E-mail vc00000@shakyo.or.jp　URL https://www.zcwvc.net/
発行人●松島 紀由　編集人●高橋 良太　制作●株式会社トライ　定価●¥110（税込）※購読料は会費に含む